

大原美術館理事長講演会報告書

主催；蔵の会、日時；2012.11.25(日)午後4時～午後5時30分

会場；大和川酒造北方風土館 昭和蔵

参加者；約80名

- 1 開会 司会進行 蔵の会事務局 五十嵐哲矢
- 2 主催者挨拶 蔵の会幹事長 佐藤彌右衛門
- 3 来賓祝辞 喜多方市長山口信也（代読 副市長佐久間弘之）様
喜多方市美術館長後藤学 様
- 4 講師紹介
- 5 講演 公益財団法人大原美術館理事長 大原謙一郎 氏
【演題】倉敷と大原美術館
——「社会の装置としての美術館」をめぐる話題——
- 6 御礼の言葉 福島県立博物館主任学芸員 川延安直
- 7 閉会

《講演要旨》

はじめに

喜多方で蔵の会主催の講演会はどうかとの柳沢課長から話があった。柳沢課長は、昔から美味しいものを見つけてくるのがとても上手い。その期待どおりの喜多方であった。蔵の会の佐藤彌右衛門さんは、いわゆる旦那さまである。蔵というのは、商人の活動のシンボルである。現在、喜多方で、大原家の収蔵品展を開催してもらっている。柳宗達先生もこの喜多方に足跡を残している。展示品の石井寛二郎、濱田庄司は生活に密着した視点で活動した。そのような作品が蔵座敷に飾ってあるのを見て、これは、正に私が考えていることそのものであり、喜多方での講演を楽しみに今日は訪問させて頂いた。今日は、先に配布したレジュメにしたがって話しを進めさせて頂いていただく。

1. 倉敷と大原美術館の自己紹介

受け継ぐのは、美しい町並みと、その中にこもる物語や心意気

京都、若松、喜多方には、それぞれ、その都市が立つ位置というものが作られている。歴史と共に、プライド、自覚の目覚めが備わるものなのだ。

倉敷は、大大名の城主が住んだ岡山市の近くにあることから、若松と喜多方の関係に似ている。倉敷は、喜多方に通じるものもあると感じて興味を持った。

アインシュタインは、学校の成績は良くなかったと聞いている。好きなことに熱中することで、物理の世界で能力を発揮した。音楽や美術・芸術には、創造力、ものを作り出す力を引き出す社会の装置であると考えた。

2. 日本の美術館はどこにどうして生まれたか

ブリヂストン（久留米）、出光（門司）、西美（松方・神戸）、倉敷、喜多方、阪神間

文化と歴史に育てられたDNAが日本をクリエイトする。

その地域には、その土地のDNAがある。そのようなことから、倉敷の紹介を始めたい。倉敷の倉は、喜多方の蔵とは様式が異なりナマコ壁だ。瀬戸内海に通じる運行で商売をし、繁栄をしていくようになった。瀬戸内海の面する地域で育った頼山陽、父の春水、浦上玉堂、円山応挙などは中国から来た巻物を見て楽しんだ。

美術館は、異文化の融和と日本の風格を高める手段だ。倉敷で、そのきっかけをつくったのが、児島虎次郎だ。日本の仲間そんな絵を見せたいと思った。ヨーロッパに来て、新しい境地を開き、日常の何気ない生活の中に、美しい事象を見だし絵にする。小島は、三回ヨーロッパに行き、日本の屏風に価値を見だし、更に日本を掘り下げた。児島は油絵に挑戦しながら、日本画を描くなど挑戦を続けた。

ブリジストンは久留米に石橋美術館、出光は門司に、神戸には西美と、地域、地方にそのような文化施設が作られているのも、これまで述べてきたことに通じるものがあるのだ。

3. 文化と美術は、日本のため、地域のためにどう働くか、働いて来たか。

戦後のヨーロッパ、アメリカで開催された日本美術展と「国の立つ位置」。

大原美術館の2階の窓から外を見ると、日本の江戸時代の商人の家並みが見える。そんな街並みの真ん中に大原美術館はある。そして、美術館の中には、ギリシャ人でありながらスペインという異国で美術作品を創作続けたエル・グレコの作品がある。児島が、モネの家に行った時に用意してくれた作品だ。障子に映る日に映える水仙、額縁の中だけに留まらないのが、日本の風景なのだ。ゴッホ、ピカソは戦後の荒廃の中から立ち上がる姿を絵に描いた。

4. 文化と美術館の視点から、この国の「南国、西国、東国、北国、山と海と島々」を考える。

関東武家文化と江戸庶民文化は良いものですが、国中これ一色になっては困ります。

生活の中に美しいものがある。喜多方と同じでしょう。倉敷の倉は、米倉であった。このような風土の中で文化が形づくられる。それらが成長し、日常的に我々の目の前に存在する。それらをサポートして行くのが我々だ。

アートは、まちのあり方と深く関わっている。美術館を観光資源として使われることを嫌がってはいないが、美術館は、観光客向けの展示はしない。そのような創造的クリエイション続ける、隠れていたものを引き出すこと、それが役目である。それが新しい事業に結びついていく。観光資源につなげることは、他の町がすることで良い。美術館はそこまでは踏みこまないのだ。

5. 文化を地域で働かせる「町衆、行政、プロフェッショナル」。

屏風祭りは、観光客のための祭りではない。神社の秋の例大祭である。主役は宮司である。そのような祭りに去年は、八万五千人の観光客が訪れた。そのような背景は、公共的マインドを持った町衆、NPO的マインドを持った行政、プロフェッショナルな展示の専門家、これで屏風祭りは成り立っている。

地方の創造力で日本文化の再生は可能なのだ。例えば、自動車産業の本拠地は、全て地方では

ないか。トヨタ、日産、ホンダ、スズキ、マツダ。クラレは新潟に主力工場が2つある。東レは滋賀県、旭化成は延岡、帝人は米沢、それは世界でも同じこと。ゼロックス、イーストマン大学なども同じ例だ。言葉と美術の仕組みを町に作ることで、その町に人材が残る。

6. オオハラは「多文化理解の装置」

大原美術館の「使命の宣言」にある、「日本と世界への責務」について

次の宣言のとおり。

大原美術館 使命宣言

1 アートとアーティストに対する使命

先人の偉業を保全・顕彰し、新しい創造活動への挑戦を支援・推進します。

2 あらゆる「鑑賞者」に対する使命

人生がより豊かで真実味のあるものとなるように、美術や文化に接する自由で良質の場を提供します。

3 子どもたちに対する使命

明日を担う子どもたちが幼児から美術や文化にかかわることが出来るように、様々な体験の場を提供します。

4 地域に対する使命

誇りと愛着を持って倉敷に生き、質の良い日本と世界の出会いの場として地域とともに生き続けます。

5 日本と世界に対する使命

世界の人々の相互理解と融和を進め、日本文化の心根を広く世に伝えるために、「多文化理解の装置」としての美術館を磨き高めます。

文責 五十嵐哲矢 121209